

6 アートがまちにもたらすもの ～旧藤野町、都市と自然をつなぐ境界のまちで起きていること～



高橋 靖典
TAKAHASHI Yasunori

一般社団法人藤野エリアマネジメント／代表理事

まちにアートを取り入れる施策は行政主導のものが多く、行政による主導が困難になるとまちなかのアートはどうなるのか。行政の予算停止や市町村合併など様々な事情を乗り越え、現在は住民と行政が連携して施策を行う旧藤野町の変遷や取り組みについて解説する。

都心から1時間、アートがコミュニティを支えるまち

神奈川県相模原市緑区、旧藤野町（以下、藤野）。2007年に相模原市に合併したこの地域は、JR中央線や中央自動車道で新宿から約1時間という利便性を持ちながら、里山や湖、森林に囲まれた中山間地域です。1980年代からアートを軸とした地域創生に取り組み、人が人を呼び、現在では地域在住のアーティストやクリエイターが400人以上になっています。住民約7,900名（2025年4月）の中ではかなり大きな比率になっています。巨大な美術館や観光名所があるわけではありませんが、結果、藤野では、生活や暮らしの中に自然とアートが根付き、日常と創造活動が一体となった独自の文化が育まれています。

また、藤野は、多摩美術大学や東京造形大学といった芸術教育機関とも地理的に近く、若い才能や創造的志向を持つ人々の関心を集めてきました。「自然に囲まれたまちで生活しながら創作に没頭できる環境」は、次第にアトリエや創作拠点の集積を生み、多様なライフスタイルや価値観を受け入れる寛容なコミュニティへと育っています。

地域内には過去の取り組みで設

置されている野外彫刻なども存在していますが、人と人との関係性そのものが代表的なアート作品と言えるかもしれません。ヨーゼフ・ボイスの「Jeder Mensch ist ein Künstler」(全ての人が芸術家である)という言葉は、人間が創造的な存在であり、社会彫刻を通じて誰もが芸術家になれるという、拡張された芸術概念と理解しています。藤野で起きている様々な活動はそのような社会彫刻的な取り組みや、地域社会の共創を促し、新たな社会的・芸術的文脈を生み出す「コミュニケーションアート」や「ソー



写真1 旧藤野町上空写真

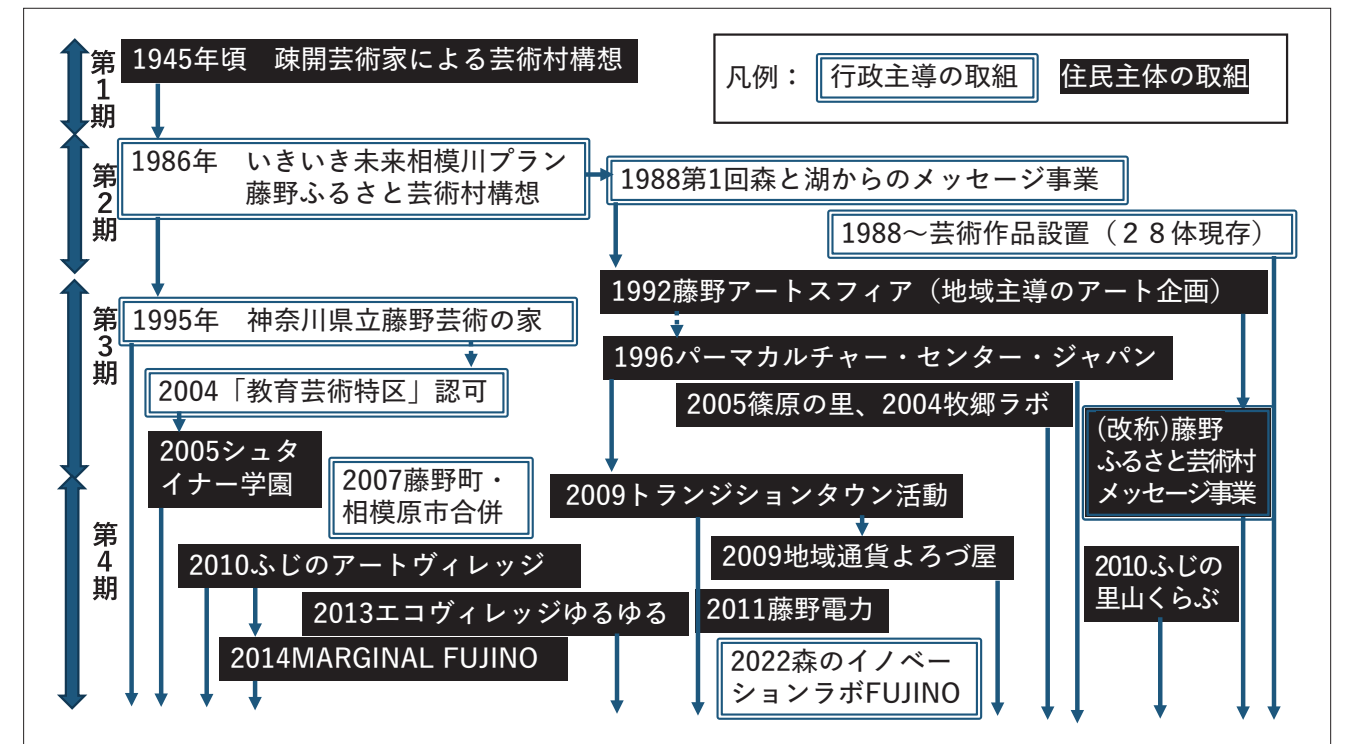


図1 これまでの藤野地区における主な取り組み¹⁾

シャルエンゲージドアート」にも通じる動きと考えています。

藤野のまちづくりの各段階

藤野のまちづくりは、次のように段階を経て進化してきました。これはあくまで藤野エリアマネジメントや研究者等による独自の区分けであり、町等の公式なものではありませんが、一つの視点としてご覧いただけたらと思います。

第1期「胎動期」(～1985年)

太平洋戦争末期、藤田嗣治、猪熊弦一郎、佐藤敬など多くの芸術家が藤野に疎開してきており、その中で美しい森と湖があるまちに芸術大学を中心とした一大芸術都市を作ろうという構想が持ち上がり、企画書が神奈川県に提出された記録が残っています。その資料は戦後のどさくさで失われてしまいましたが、一つの芸術の種が蒔かれたともいえます。地理的にも甲州街道が通り、その後JR中央線や中央自動車道が整備され、常に人が行き交う場所であっ

たことも、新しい取り組みを受け入れやすい地域風土の背景にあるのかもしれません。

第2期「行政主導期」(1986年～)

1986年に「いきいき未来相模川プラン」が、神奈川県と相模川流域13の市町村合同でスタートします。7つの拠点を設置して、モデル事業を進める取り組みの中で、「森と湖と創造の拠点」に指定され、



写真2 アーティスト工房もあちこちに



写真3 駅近くの観光案内所でも地元作家の作品が並ぶ

「藤野ふるさと芸術村構想」が打ち出されました。神奈川県主導による野外彫刻の設置や芸術イベントが試みられ、「アートによる地域づくり」の試みが始まります。また、行政に頼るべきではないという動きから「砂の曼荼羅」という在来芸術家主導のイベントも開催されています。

第3期「行政主導から住民主導への移行期」(1992年～)

バブル崩壊等もあり、神奈川県は予算を停止。藤野町に権限が移ることになります。数億円あった予算は2000万円に。その後、当時の町役場の職員が奮闘し、少額ながら地域の様々な芸術活動に予算を出していく取り組みと合わせて、その担い手である芸術家に空き家の斡旋などを始めます。住民が主体となった芸術祭や地域プロジェクトが展開。1996年には環境教育拠点「パーマカルチャー・センター・ジャパン」、1997年には芸術家を中心とした「きのこぷらんにんぐ」が発足。2000年には「藤野ぐるっと



写真5 アートワークショップ



写真4 シュタイナー学園

陶器市」が始まるなど、現在につながる活動も始まっています。

また、2005年には旧藤野町の廃校を活用し、構造改革特区による「藤野『教育芸術』特区」としてシュタイナー学園が開校。芸術と手仕事を重視した独自カリキュラムにより、子どもたちは表現力と創造性を育み、全国から移住者を呼び込む効果を生み出しました。当初は100名程度だった移住者は、現在では親子合わせて500名以上が藤野に在住しており、子どもが卒業後も定住する家庭が増えています。オルタナティブな学校の開校は地域人材の層を厚くします。一例では、保護者である医師たちが近隣地域を含め4つの診療所を開業し、地域医療が向上する結果を生みました。

第4期「住民主導期」(2007年～)

相模原市との合併後も、藤野ふるさと芸術村メッセージ事業は市民による事業推進委員会の運営が



写真6 芸術の道の作品

持続。また、シュタイナー学園保護者、パーマカルチャーの卒業生、地域住民を中心に立ち上がった地域を持続可能に移行させるトランジションタウン活動が2008年にスタート。藤野地域通貨「よろづ屋」や、自然エネルギー事業「藤野電力」など、生活基盤から経済に至るまで持続可能な社会モデルの実践が進められています。2010年には藤野エリアマネジメントにより、コンテナと食堂を含む、「ふじのアートヴィレッジ」を開始します。アーティストやクラフトワーカーの作品が展示、販売されています。また、2012年にはシェアオフィス「MARGINAL FUJINO」(旧ふじのアートヴィレッジ2)が、ホテルの廃墟を拠点にスタート。こちらでも製材所や様々なジャンルのアーティストのアトリエとして稼働させており、アートとビジネスを融合する場として動き始めています。

また、2013年芸術家の傍嶋飛龍氏による「廃材エコヴィレッジゆるゆる」では、廃材を活用した拠点として工場跡地を整備し、創造的な循環型の暮らしが実践されています。その活動に共感する地域外を中心とする1,000名以上が参加しており、通い型のコミュニティとして様々な活動を実践しています。

第5期「住民と行政の連携期」(現在)

現在は、住民と行政が改めて連携しながら新たな地域創造に挑むフェーズに入っています。その一つが2022年にスタートした「森のイノベーションラボ FUJINO (森ラボ)」です。旧役場庁舎をリノベーションした森ラボは、テレワーク拠点であり、起業支援、地域課題解決のリビングラボでもあります。設置は相模原市緑区が行い、運営をアーキタイプ・藤野エリアマネジメント企業連合が民間として行っています。アート思考をベースにした体験プログラムや、新たなビジネス創出プロジェクトに取り組み、地域の未来を担う場となっています。

さらに、森ラボはアート体験や起業支援、中山間地域課題解決の実践の場として、若手からシニア層まで多世代が交わりながら新たな価値を生み出しています。ここでは、アート思考と地域資源が融合し、



写真7 小規模なイベントも多数開催される

未来に向けた新たな経済・社会モデルが育ちつつあります。

また、近年では新しい場のプロジェクト「虫村 (バグソン)」を、コワーキングスペース「co-ba」、リノベーション住宅プラットフォーム「cowcamo」などの事業を行ってきたツクルバの創業者、中村真広氏が開始。賃料を設定せず、「お金を払う人ともらう人」という関係性をなくす取り組みを「感謝経済」として実践しています。これもまた社会への問いかけを含んだアート活動といえるでしょう。

結びに：未来へ向けたまちづくり

まちづくりに求められるものは、単なるハード整備ではありません。住民の営みや地域の文脈に寄り添いながら、価値を共創していく「ソフト型」のまちづくりが重要になっています。

藤野の歩みは、アートを通じて人と地域、自然と社会が接続され、新たな物語が紡がれてきたプロセスそのものです。これからも、アート、教育、地域エネルギー、デジタル起業支援が有機的に連携し、藤野ならではの「創造型の地域社会」を築く挑戦は続いていくと思われます。高規格なまちではなく、アートを軸として高密度な関係性を育むまちへ。ぜひ藤野に足を運び、未来への物語に触れてみてください。

<参考資料>

1)「中山間地域における芸術のまちづくりが移住者の移住動機に与える影響について—相模原市緑区藤野地区をモデルとして—」、道祖英一・瀬田史彦、都市計画報告集 No.22、2022年8月